助字から見た萬葉歌

――満ち缺けすれそ人の常なき――

工藤力男

はじめに

萬葉集巻第七の中ほど、「寄物発思」の標目下に、「右一首古歌集出」の左注をもつ歌一首（1270）がある。寛永版本によって本文と訓を別行に掲げる。

隱口乃泊瀬之山丹照月者盈昃爲烏人之常無

コモリクノハツセノヤマニテルツキハミチカケシテソヒトノツネナキ

「烏」の字は、この版本の他の箇所でもおおむねこの字形で実現している。この箇所を『校本萬葉集』で検すると、温古堂本に文字がなく、紀州本が「乎」につくる以外、他の有力古写本は「焉」と認めるべき文字でかいており、そう翻字してさしつかえないものである。第四句末の訓が係助詞「そ／ぞ」であることもそれを語っている。

この訓をとる近代の二注釈書から現代語訳をひく。

こもりくの（枕詞）初瀬の山に照る月は、或は満ち、或は缺けて、其の如くに人は無常である。

（土屋文明『萬葉集私注』）

初瀬の山に照る月は、満ちては欠けて定まりがない。（それと同じように）人間というものは無常なことよ。

（日本古典文学大系）

右にみるように、『私注』は結句へのつなぎに「其の如くに」を補い、「大系」は第四句でいったん歌をきり、その

上で「それと同じように」を補っている。

右の二つの解は、語句を補ったり途中できったり、歌の形から離れている印象が拭いがたい。かかる乖離はなぜ生じたのか、ほかに考える術はないのか。本稿は、そうした問題意識にたち、「焉」を中心にすえて助字を広く視野にいれ、この歌について新しい訓を探る試みである。

以下の論述は主に塙書房版の本文によって進める。他本によるときは、特に助字の扱いが異なりうることは当然である。なお、歌の下の括弧内に横組みであげた数字は『國歌大觀』の歌番号、人名下のそれは著書・論文のキリスト暦による発表年次である。言及箇所を含む萬葉歌を原文でひくばあいは句単位で右に訓を付す。旋頭歌の第三四句間に空白をおき、長歌は省略した部分を点線で示すことがある。周知の書名は適宜に略記する。

一

初めに萬葉集の「助字」をひととおり眺めておきたい。

本稿で「助字」の語を用いることに特別な意味はない。「語気詞」「虚字」「虚辞」「助詞」などの称も行われ専門家のあいだにも定説はないので、中国では使わない「語気詞」、日本語の品詞と紛らわしい「助詞」を避け、本稿の学ぶことが多かった小島憲之（1964）に従ったまでである。考察する範囲も、不・被・耳・乍・至などまで広げる必要はあるまい。これらは古代日本の漢字文表記で訓が定まり、萬葉歌においてもほとんどゆれることがない。

初めに「矣」。これは萬葉歌でよく用いられた助字で七十例ほどある。

潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が浜づと乞はば何矣示（なにをしめさむ）　（360）

秋風の寒き朝明（あさ）けを佐農の岡越ゆらむ君に衣借（きぬかさ）ましを矣　（361）

…国問へど　国矣毛不告（くにをものらず）　家問へど　家矣毛不云（いへをもいはず）…　（1806）

右のように格助詞と終助詞「を」の位置に定着して、さながら「を」の仮名のごとき様相を呈する。

「従」には「ゆ／よ／より」の三つの訓がありうるが、記定の時期を慎重に吟味し、音数律を加味することによってほぼ一つに絞ることができる。それに比べると、「哉」は「か／かも／や／やも／やし」の間でゆれて定訓のない

歌もある。

四十近い用例がある「於」のうち、次の歌は「於」を動詞に前置した唯一の例であるが、訓は名詞についたものとかわらない。

天の河去年の渡代移ろへば河瀬於踏夜そ更けにける　(2018)

わたしはこの「於」を、動詞の連体形に接した助詞「に」と解したが、近年刊行された『萬葉集索引』では助詞「を」としている。「河瀬於踏」と解釈したらしい。それによると、萬葉集時代すでにオ・ヲの仮名違いがおこっていたことになるが、ほんとうにそれでよいのだろうか。

「者」を「は／ば」と訓ずるのは数えきれないほどある一方、「さ」の訓を負う五例は、狭くとるたちばでは形容詞に「さ」の接した名詞形に限られ、そのうち四例は喚体句の位置におかれる。一例ずつあげる。

天にます月読男幣はせむ今夜乃長者五百夜継ぎこそ　(985)

高松のこの峰も狭に笠立てて満ち盛りたる秋香乃吉者　(2233)

ほかに存疑例一つ「黄葉早者」(2217)がある。

わりに用法の複雑なのが十数例の「也」である。まず指摘しうるのが、形容詞由来の名詞形による喚体句、係りに対する結び、命令表現にそえたもの、この三種である。

大君の御笠の山の帯にせる細谷川の音乃清也　(1102)

我がやどに咲きたる梅を月夜良み夜々見せむ君乎社待也　(2349)

夜に逢ひて朝面無み隠野の萩は散りにき黄葉早續也　(1536)

訓法に議論があって断定はしがたいが、右以外に特定の語法にあてはめえぬまま「不読」と処理しておくほかないものが、次の例など四つほどある。

たらちねの母の命の言にあらば年の緒長く憑過武也　(1774)

さて、「之」はノ・ガの正訓字としても、シの音仮名としても圧倒的多数の用例をもつ文字である。だが、助字の機能を大幅に広げて解釈する鶴久氏の訓では様相が一変する。本稿はそこに深くふみこむ意図はないので、鶴久・森山隆共編の『萬葉集』(補訂版1977櫻楓社)から一例ずつひいて簡単に言及するにとどめる。

吉野川逝瀬之早見しましくも澱むことなくありこせぬかも　（119）

春之雨者いや頻き降るに梅の花未だ咲かなくいと若みかも　（786）

白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも　春霞田菜引野辺之鶯鳴くも　（1888）

右の三首にみえる「之」は、その訓以外に決してよめないわけではなく、他書はおおむね「の」と訓じている。わたしも「の」の表記と解してよいと考える。

天霧之雪も降らぬかいちしろくこの厳柴に降らまくを見む　（1643）

打霧之雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも　（1441）

「天霧之」三例、「打霧之」一例の「霧之」を鶴氏は「きらひ」と訓ずる。萬葉集に「天霧相／天霧合／雨霧相」の表記例があるので、それに揃えようとするのである。だが、「之」の文字を、あえて動詞の再活用語尾「ふ」にあてた意図が説明されなくては肯ないがたい。伊藤博『萬葉集釋注　四』は「天霧之」（1643）を「あまきらし」と訓じて櫻楓社版の訓を紹介するにとどめ、井手至『萬葉集全注巻第八』は「うちきらし」（1441）の訓をとらないことを明言した。私見は工藤（1996）にかいた。

ほかに次の一例がある。

梓弓春山近く家居之継ぎて鳴くらむ鶯の声　（1829）

右の歌の「之」の訓は次の歌などの表記に支えられる。

梅の花咲ける岡辺に家居者ともしくもあらず鶯の声　（1826）

恋ひつつも稲葉かきわけ家居者ともしくもあらず秋の夕風　（2236）

この「者」と「之」の通用は、古事記・日本書紀などにもみえており、それが漢籍の表現に由来することは、小島憲之（1964）に詳しい。

以上の処理の網にかからないものがなお残る。

梅の花我は散らさじ青丹よし平城之人来つつ見るがね　（1906）

…慰もる　心もあらず　そこゆゑに　為便知之也…　（196）

沫雪に降らえて咲ける梅の花君之許遣者依そへてむかも　（1641）

次の歌の第四句は訓が定まらなかった。

川の瀬の石踏み渡りぬばたまの黒馬之来夜者つねにも
あらぬかも　（3313）

従来、「くろうまのくるよは」「くろまのくよは」などと訓ぜられていた。それぞれ、単独母音を含む二字の余り、一字の余り、連体修飾の破格である。稿者も校注に参加した新日本古典文学大系『萬葉集』では、考えあぐねたすえに「黒馬之来夜者」の訓をつけたのであった。

二

本稿の対象歌に用いられた助字「焉」の、萬葉集における使用実態を検討しよう。これは多彩にして複雑である。本節では用例に丸数字の通し番号をつける。

初めに詠嘆の情をこめて終助詞の位置に出現したものをあげる。①②③が「を」、④⑤⑥が「も」の例である。

①児らが家道差間遠焉ぬばたまの夜渡る月に競ひ敢へ
むかも　（302）

②今よりは秋風寒く将吹焉いかにか独り長き夜を寝む
（462）

③甚だも夜更けてな行き道の辺の斎篠の上に霜降夜焉
（2336）

④白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも　春霞たなびく野
辺の鶯鳴焉　（1888）

⑤…思ひ来し　恋尽くすらむ　七月の　七日の夜は
吾毛悲焉　（2089）

⑥馬柵越しに麦食む駒の詈らゆれどなほし恋しく思不
勝焉　（3096）

次に係り結び構文で結びの位置に用いられた例をあげる。⑦⑧が「そ」の結び、⑨⑩が「こそ」の結びである。

⑦あしひきの岩根こごしみ菅の根を引かば難みと標耳
曾結焉　（414）

⑧向つ峰に立てる桃の樹成らめやと人曾耳言焉汝が心
ゆめ　（1356）

⑨天雲のよそに雁がね聞きしよりいやますますに戀許
曾増焉　（2132一二）

⑩秋萩の恋も尽きねばさ壮鹿の声い継ぎ継ぎ戀許増益
焉　（2145）

右とは反対に、「そ」が係り結びの係助詞の位置に用い

られた⑪⑫がある一方、断定辞として機能する⑬⑭⑮がある。「そ」は本来このように係助詞としても断定辞としても機能し、さらに指示機能も有する語だったようだ。

⑪纏向の痛足の山に雲居つつ雨は降れども所沾乍焉来　(3126)

⑫うらもなく去にし君ゆゑ朝な朝な本名焉戀逢ふとはなけど　(3186)

⑬…不盡川と　人の渡るも　其の山の　水乃當焉…　(319)

⑭風高く辺には吹けども妹がため袖さへ濡れて苅流玉藻焉　(782)

⑮面忘れいかなる人の爲物焉われはしかねつ継ぎてし思へば　(2533)

完了辞「ぬ」の終止法の位置に出現した三例がある。

⑯君に恋ひしなえうらぶれ我が居れば秋風吹きて月斜焉　(2298)

⑰…あぢさはふ　夜昼知らず　かぎろひの　心燃えつつ　悲惨別焉　(1804)

⑱うつせみの常の言葉と思へども継ぎてし聞けば心遮焉　(2961)

命令形の下におかれることもあり、これは「也」にもみられた用法である。

⑲佐保川の岸の司の少歴木莫苅焉　ありつつも春し来たらば立ち隠るがね　(529)

「～を欲り」でおわる、動詞の連用形終止と称すべき二例がある。ともに四句切れの歌で、結句は理由をのべる倒置法表現をなしている。

⑳月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をそせし行乎欲焉　(736)

㉑山辺には猟雄の狙ひかしこけど壮鹿鳴くなり妻之眼乎欲焉　(2149)

そのほかに形容詞とともに用いられた三例がある。㉓はミ語法の下に用いられ、前条と同じく倒置法、㉒㉔は形容詞終止形の下におかれたものである。

㉒春日野に粟蒔けりせば鹿待ちに継ぎて行かましを社師怨焉　(405)

㉓秋萩の散り過ぎ行かばさ壮鹿はわび鳴きせむな不見者乏焉　(2152)

㉔思はぬにしぐれの雨は降りたれど天雲晴れて月夜清焉　(2227)

以上のほかに定訓が得がたくて保留した一例がある。新大系の訓をそえてあげておく。

㉕…はしきやし　我が大君の　形見何此焉（かたみにここを）　（196）

当該歌の訓も当然みぎの範囲で考える必要がある。寛永版本の訓に適宜に漢字を交えて再掲する。

㉖こもりくの泊瀬の山に照る月は盈戻爲焉（みちかけしてそ）人の常なき

この歌の「焉（そ）」は、状況を説明する成分の一部になっている点では⑪⑫に近い。その二例は句の途中に位置し、上接語句と一つになって直下の動詞に係るのに対して、㉖では第四句の句末に位置し、結句への係りに一ト呼吸おかれる点が異なる。わたしにはこの差異が無視できない。

三

本稿の発端になった㉖の歌の本文に問題がないらしいことは冒頭にのべたが、訓となると事情が違う。寛永版本の第四句の訓は「ミチカケシテソ」であるが、この部分を中心に、校本萬葉集から訓と諸説の記事を摘記する。

元・古・宮「するそ」。類・紀・西・細・廣・京左赭「するを」。西、三字青、漢字の左に「シテソィ」あり。矢・京、三字青、陽「シテソ」青。

童蒙抄「テルツキモ」カ。童蒙抄「スルゾ」、萬葉考「スルヲ」、略解「シテヲ」、古義「シケリ」、略解補正「スルモ」。

この歌について最も深くふみこんで発言したのは澤瀉久孝『萬葉集注釋』であろう。そこでは、古義が「ミチカケシケリとよむべし　照月さへも盈戻しけり、されば人身の無常（ツネナキ）は道理ぞ、とあきらめたるなり」として、例歌（4160）をあげていることを紹介・検討したすえに拒否した。また、シテヲと訓じた略解・佐佐木信綱『萬葉集評釋』のように、「満ちたり缺けたりすることである」ときって解釈することを否定した。萬葉考・金子元臣『萬葉集評釋』のスルヲの訓についても、萬葉考が「月はみちかけしながらも常にてよけれど」と余計な言葉を加えたのは、その「を」ゆえであると却下した。そして、⑬～⑮同様に断定辞「ぞ」と解することを主張して「ミチカケシテゾ」と訓じ、

その「ぞ」は係詞として下にかかるのではなく、一旦切れる。結句は独立文と見るべきであり、一〇五のやうな連体止で余情を含めたものと見るべきであり、

とした。口訳は左記のとおりである。

泊瀬の山に照る月は満ちたり缺けたりしてゐるが、そのやうに人生もまた無常であることよ。

結句は独立文とみるべきだとのべたのに、口訳はそうなっておらず、論述と口訳が矛盾している。

さて、近年の注が多くよっている古義の「ミチカケシケリ」を拒否した澤瀉氏の論拠には学ぶべきものがある。すなわち、「けり」の読みそえは人麻呂歌集略体歌にはある（2242・2414など）が、ほかには「所沾香裳」（1675）など僅かで、「けり」の読みそえとして「焉」を用いた例はないというのである。それでは、「けり」は仮名以外でいかに表記されていたのだろうか。總索引を手がかりに検すると、「にけり」を含む用例数は、「来」五十九、「来有」三、「来理」一、「在」六である。稲岡耕二（1991）によると、人麻呂歌集古体歌には澤瀉注釋があげたほかに読みそえが三例ある。ここにおいて、萬葉時代の「けり」はまだ「来」の意味をひきずる概念語として把握されていたらしいことが思いだされる。『時代別国語大辞典上代編』は「けり」の項で、「語源的には来（キ）-アリの縮約形のケリと同じもので、両者のいずれか区別できない例もある。」とする。かくて近年の訓「ケリ」は再考する必要があるのである。

月を見て恋しい人を偲び親しい友人を思う、と詠んだ歌が多い萬葉集にあって、人生の無常を詠む歌もある。「作者未詳」とされた「悲膳部王歌一首」である。

世の中は空しきものとあらむとそこの照る月は満ち缺けしける　（442）

あえて喋々するまでもなく、当該歌に通う心情の詠出である。初二句によって無常の観念をのべ、月の満ち缺けとの因果関係に思いを致す。引用の助詞を含んでいるが句切れはなく、歌末の詠嘆まで一気に詠まれた形である。

さて、当該歌について、近年は澤瀉注釋が拒否した訓、すなわち第四句末の助字「焉」に隠れた訓を「けり」として、四句切れにする解が多いことは先にのべた。今度はそれらの現代語訳をいくつかみよう。

泊瀬山に今照つてゐる月は、満ち缺けをしたことであつた。人間には永遠性のないことだ。

（窪田空穂『萬葉集評釋』）

（こもりくの）泊瀬の山に　照る月は　満ち欠けすることだ　人のはかなさよ　（新編日本古典文学全集）

これをよむと、月を詠んだ四句と人生の無常を詠んだ結句

が分裂し、木に竹をついだようにそれを結びつけた感じで、詠み手の感動がさっぱり伝わってこない。

作者は、この歌を詠んだとき初めて月の満ち缺けをしったわけではあるまい。この歌の主題は人生の無常であり、無常に対する嘆きである。月の満ち缺けと人生の無常を結びつけたことが詠歌の要であろう。その嘆きがわずか七音で詠まれて上の四句ときれている。その結句の軽さが問題なのではあるまいか。

四

当該歌のように、第四句で切れて歌末に深い詠嘆を表出したどんな歌があるだろうか。萬葉歌にそれを思いだそうとしたが、わたしにはできなかった。やむなく巻第一の冒頭から巻第五まで走りよみしてえたいくつかをあげよう。以下の引用では句切れ箇所に読点をおく。

河のへのゆつ岩群に草むさず常にもがもな、常娘子(とこをとめ)にて　(22)

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな、巨勢の春野を　(54)

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りななん、言痛(こちた)くありとも　(114)

家に来て我が屋を見れば玉床の外(ほか)に向きけり、妹が木枕(こまくら)　(216)

しきたへの枕ゆ潜(くく)る涙(なみた)にそ浮き寝をしける、恋の繁きに　(507)

右の五首は確かに四句切れであるが、結句は、詠み手の状態、動作の対象語、主格語、原因など、先行表現の補ないとして加えられた、いわば倒置表現であるにすぎない。

そのほかには、第四句と結句が並立の関係の歌、結句が引用句である歌もある。

君が行き日長(け)くなりぬ山尋ね迎へか行かむ、待ちにか待たむ　(85)

あさりする漁夫(あま)の子どもと人は言へど見るに知らえぬ、うまひとの子と　(853)

歌の構造はこの程度である。それらの中で次の一首は少し異なる。

しきたへの袖かへし君玉垂れの越智野過ぎ行く、また逢はめやも　(195　人麻呂)

古典大系の大意は「敷栲の袖をかわして共に寝た皇子は越

野を過ぎ去ってしまわれた。またも逢うことがあろうか。ありはしないのだ。」とある。結句の反語を訳出してあるが、直訳に近く、これで過不足はないといえる。第四句に詠嘆をこめた表現がないので、歌が分裂した印象を与えず、結句は充分に詠み手の思いを言語化しえたのである。

前節末に記した、解釈の不満は何に由来するのか。訓と現代語訳を前節に引いた新編全集には、それにふれることになる記述がみえる。結句に関する左記の頭注である。

人の常なき――連体止め。あるいはこの上に「うべそ（道理で）」のような語句が省かれたような続き方か。

この方向で歌を見直すべきではないだろうか。すなわち、「うべそ」が省かれたのではなく、それは「焉」に含意されるのだと。当該歌の感動は結句に存するのだから、それを第四句で解きはなたず、おわりまで維持すべきなのである。

右の解釈には、当該歌の構造を、【条件節＋係助詞～連体形止め】と把握する必要がある。そこで「そ／ぞ」によるこの構造の萬葉歌をあげ、条件節に傍線を施す。

朝髪の思ひ乱れてかくばかり名姉（なね）が恋ふれそ夢に見える　（724）

我が待ちし秋は来たりぬ妹と我（あれ）と何事あれそ紐解かずあらむ　（2036）

時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ　（4323）

研究者には周知のことだが、古代和歌には「已然形で言い放つ法」とよばれる語法があった。特に順態接続の確定条件表現で、已然形にじかに係助詞がついて接続助詞「ば」を要しない例は多い。右の第一例についていうと、これで「名姉が恋ふればそ」の意味がみたされたのである。

当該歌の第四句「盈昃爲焉」を、ミチカケシテソと訓じても、ミチカケシケリと訓じても的確な理解に到達しないことをわたしは縷々のべてきた。この隘路からぬけだすには、「已然形で言い放つ法」により、当該歌を【条件節＋係助詞～連体形止め】構造で捉えるほかにない、と考えるのである。当然、卑案の訓は左記のようになる。

こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち缺けすれそ人の常なき

五

前掲の訓をえたのは、新大系の校注に携わった七年前のことである。だが、五人の討議の席では強く主張しえなかった。一つの難点があったからである。

現代日本語において、条件節の主格につく助詞は、順接と逆接で異なるのがふつうである。それを作例してみると、次の四文はいずれも自然な日本語だといえよう。

嫁がよくしてくれたので、旅行券を贈りました。

石油価格が高騰したから、景気が減速したのです。

嫁はよくしてくれたが、旅行券を贈りませんでした。

石油価格は高騰したけれど、好景気が続いています。

この二つの助詞について、萬葉歌の解釈文法の説明にゆれはなかったし、現在の構文論でも、順態条件節は独立性が弱いので主格には「の／が」が用いられやすく、逆態条件節は独立性が強いので主格には「は」が用いられやすいと説明されている。

訓について議論のあった歌でそれをみよう。

冬過ぎて暖来者年月は新たなれども人は古りゆく（1884）

第二句「暖」への読みそえが古写本でノとシにわかれ、近代の注釈家も同様であった。澤瀉注釋はこの句を「はるのきたれば」と訓じ、その根拠を「副詞句で「バ」の受ける場合は、「ノ」「ガ」を用ゐる例である。」と説明した。ここにいう「副詞句」は順態条件節の意である。同じ術語は佐伯梅友（1938）も用いており、副詞句において「ば」のうける場合の用例として次の歌をあげた。

高光るわが日の皇子のいましせば島の御門は荒れざらましを（173）

家にありて母が取り見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（889）

山の峡そことも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れれば（3924）

ここの論点は、じつは工藤の前稿（2006）のそれでもあったのである。前稿では、従属節の格助詞「が」の勢力が主節には及ばないことを論じた。右には、条件節の主格表示に「が／の」が用いられることをみた。前稿と本稿とは、一つの現象を裏からみると表からみるとの差にすぎないといえようか。

卑案「こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち缺けすれそ人の常なき」では、第四句までが順態条件節である。だが、条件節の主格句「照る月」が係助詞「は」をとっており、右にみた傾向にあわない。これが難点であることは、澤瀉・佐伯氏の論によるまでもない。「照る月の」が望ましいのだが、原文「照月者」に異文はない。

かつてこの問題に接近していたらしい井上通泰『萬葉集新考』の説がある。そこでは、旧訓のミチカケシテゾをとって順態条件節によみ、次のようにといたのである。

第三句の者は誤字にてテル月ノならむ。上三句は序なり。即テル月ノ如ク盈缺シテといへるなり。

得意の誤字説である。四五句を一続きに解するのはかえって誤りだ、と澤瀉注釋は退けた。上三句を序とする解には賛同できないが、誤字説によってでも「照る月の」と訓ずる主張は問題の本質をついていた、とわたしは考える。

これはいかに解決すべきか。佐伯氏は先の記述のあとで、「例外の多い言語現象のことであるから、こゝにも例外はあるけれども、その数は極めて少ない。」として、若干の例外を萬葉集と他の奈良時代文献から拾っている。萬葉歌から三例をひく。

…しばしばも　見さけむ山を　情なく　雲の‖隠さふべしや　(17)

…時ならず　過ぎにし子等が‖　朝露の如　夕霧の如　(217)

…百鳥の　来居て鳴く声　春されば　聞きの‖かなしもいづれをか　分きてしのはむ…　(4089)

右はいずれも「が／の」をとる理由の説明が難しいものである。佐伯氏はさらに、音数律の制約がないにも関わらず助詞をとらない場合もある、として次の歌をあげた。

竹敷の浦廻(うらま)のもみぢわれ‖行きて帰り来るまで散りこすなゆめ　(3702)

「わが行きて」が可能なのにそうしていない、逆の例外だとしたのである。

森重敏（1949）も萬葉歌と古語拾遺から十例ほどをあげて論じた。その一つ、佐伯氏の第一例についての論拠を簡潔に要約することは難しいが、一言でいうと、複雑にこみあげる感動の表出が文法の制約をこえた結果だ、といえるだろうか。

木下正俊（1965）は、よめない、または難解な萬葉歌四十七首を多方面から検討した。その中の二首に注目する。

大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ　（66）

この歌で、「枕き寝」と「家し偲はゆ」を逆接助詞「ど」で繋ぐことは不審で、むしろ「ば」とあるべきではないか。諸説のうち、金子評釋の「面白い浜の松が根を枕にして寝るやうな楽しい筈の旅であるけれど」の、「ど」の解釈に忠実な点は認められるという。省略を想定した解釈である。

もう一首は大伴家持が婚約者に贈った歌である。

なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて不恋日将無　（408）

第二句の「にもが」は希求を表わし、～であってほしいの意である。結句の動詞「恋ふ」は、本来眼前にないものを慕う意なので、古典大系が「めでる」という訳を与えたのはゆきすぎではないか。家持は「恋ふる日無けむ」というべきを、恋しさから解放されたいあまりに、「恋ひぬ日無けむ」と誤ったのだと思うとして、「人言の繁きこのころ玉ならば手に巻き持ちて恋ひざらましを」（436）などはその推測の傍証になるとしている。先の歌は家持の言い損ないだが、「不恋日」は「不」字が紛れこんだものと解することはかえって正しくあるまい、と結んでいる。

結局、詠み手の思いが先走るあまり、文法をふみはずすことがある。佐伯、森重、木下氏はそういうのである。卑見も、一概に文法の破格として処理せず、詠み手の心情とその表出の意欲をくもうとするたちばから、次の結論に到達した。すなわち、泊瀬山を照らす月は作者の日ごろみているものである。したがって、これはある日ある時の月を詠んだ歌ではない。そこで、主格の「の」をもってせず、一般的な命題を呈示する助詞「は」を用いた。月というものは、の意である。それは、結句で人の命の無常を詠むための、対比の「は」でもあったのである。

当該歌に酷似する問題を含むもう一首の歌がある。

河渚にも雪は降れれし宮の内に千鳥鳴くらし居むところ無み　（4288）

第二句の原文は「雪波布礼ゝ之」。「り」の已然形で言い放つ法の唯一例であるばかりでなく、それに強意の副助詞「し」の承接した唯一例でもある。そこで、也→之の誤写かとする古典大系の説も出た。その蓋然性は否定しきれないが、この「し」は第四句末の「らし」と呼応してもいるので、この形で解釈したい。

この歌に関する最も詳しい記述は新編全集にある。「名

姉が恋ふれそ」（724）「降る雪の千重に積めこそ」（4234）をあげて、この歌は条件節の主格が助詞「の／が」をとる原則からはずれていることを指摘し、「内容的に二句切に近いものがあったことを示すか。」と結んだ。

天平勝宝五年正月十一日、奈良の都に大雪がふって翌日も続いた。この歌は「十二日侍於内裏聞千鳥喧作歌一首」の題詞をもつ大伴家持の作である。他者の歌は収めていないが、題詞から推測すると、ほかの人の作もあったかもしれない。とまれ、その席で詠まれるべきは雪にきまっている。それを主題にして「雪は、河渚にも降れれし宮の内に…」と詠むべきところ、音数律のつごうで初二句の順序をいれかえてこの形に詠んだのだ、とわたしは考えている。確かに条件節の助詞のありかたからそれてはいるが、そのような背景をくみとることが必要であろう。

なお当該歌では、主節である結句の主格が「は」ならぬ「の」となっている。これは、第四句の係助詞「そ」によって述語が連体形で結ぶことを求めているからである。その実例として、同じように一般的な命題を詠みながら、係助詞「そ」が先行し、主格が助詞「の」をとった次の歌の初二句が参考になる。

かくしてそ人之死云藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに（3075）

新大系の大意は「こんな風にして人は死ぬと言います。藤波のような、ただ一目だけ見た人のために。」とある。第四節にあげた「時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ」では、対比よりも係り結びの力が強くはたらいて「花は」にならなかったのだろう。

この歌を詠むにあたって、作者は人生の無常と月の満ち缺けを結びつけることに思い至った。そこで四句までを順態条件に構成し、帰結を結句にすえることで一首の歌を完成させた。卑見によって当該歌を現代語に移すと次のようになるだろうか。「こもりくの泊瀬山に照る月は満ち缺けするものだから人の命は無常なのだ。」

おわりに

萬葉歌「隱口乃泊瀬之山丹照月者盈昃爲焉人之常無」の第四句はさまざまに訓ぜられてきたが、いずれの訓にも歌として不自然な点が残る。それは第四句末の「焉」の訓に関わるとわたしは考えた。

本稿では、初めに萬葉歌に用いられた漢文の助字全体を見わたして「焉」に及び、これが「けり」の訓を負えないことを論じた。そして、「已然形で言い放つ法」という古代和歌の語法によって、已然形をうけて係助詞「そ」を担う助字と訓ずること、第四句までを順態条件節と解すべきこと、「照る月は」を文法の破格としては処理せず、あえてかかる表現をなした詠歌の状況に配慮すべきことなどを論じた。よって、この歌は「こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち缺けすれそ人の常なき」と訓ずべきである。

本稿にひいた論に三四十年以前のものが多いのは、近年かかる議論が乏しいことを語っている。萬葉歌の訓詁の論は、もうはやらない、全くの少数派に属する営みであるようだ。だがわたしは、萬葉歌の確かなよみを究めるべく愚直な歩みを続けようと思う。

【引用文献】

稲岡耕二（1991）『人麻呂の表現世界』（岩波書店）

木下正俊（1965）「読めない万葉歌」（『国文学解釈と鑑賞』第三十四巻二号　至文堂）

工藤力男（1996）「書評・鶴久著『萬葉集訓法の研究』」（『国語学』第百八十八輯　国語学会）

工藤力男（2006）「格助詞の射程――のち見むと君が結べる――」（『成城国文学』廿二号　成城国文学会）

小島憲之（1964）『上代日本文学と中国文学　中』（塙書房）

佐伯梅友（1938）『萬葉語研究』（文学社　引用は再版（1963有朋堂）による）

森重　敏（1949）「結合語格補説――「情無　雲乃隠障倍之也」――」（『国語学』第二輯　国語学会）

【付記】 本稿は、「格助詞の射程――のち見むと君が結べる――」（『成城国文学』廿二号　2006）に続く、「新日本古典文学大系『萬葉集』校注拾遺の六」にあたる。

【追記】 第一節（27ページ終り乃至28ページ下段）の「之」に関連する記述として、「見る」とミ語法の対象表示に用いられた「之」を「を」と訓ずる鶴氏の説を指示する論文、山口佳紀「『万葉集』における［非単独母音性の字余り句］について」（『萬葉』百八十八号　2004）がある。

（初校に際して）